

とある政府の幹部の日記帳(プロローグ)

黒月 揚羽

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女と刀剣男子が色々な修羅場をくぐり抜けるお話です。

刀剣破壊のシーン今は入れる予定ないけど入るかもしれません。苦手な人は回れ右です。

政府には刀剣男子や本丸の事件を担当する部署がある。エリート揃いの部署の名は「政府緊急対策部」

別名、無人部。名の由来はその仕事に対する徹底さから、人に大切な何かがない。人ではない。という意味で名付けられた。

最年少の少女は仕事に対してこう返す。

「仕事？あー、面倒なハードなの以外がいいんだけど、そうもいかないのがね・・・。」
これより綴るは少女と仲間の事件簿。人としての欠落を抱えて生きる彼女達のなんと健気なことか!!

報われたとしてもハッピーエンドなど分かりはしない。どこからおかしくなった？
そんな風に考える暇など存在しない。いつそバットエンドにでもしてしまおうか？

さあさあ、お聞き下さい！機械のような少女とその仲間達の紡ぐ事件簿を！・・・救
いがあるのなら、彼女達に幸あれ。

目次

第一部　く少女、仕事につきく

少女、事件につき	1
少女、異端児につき	4
少女、帰宅につき	7
少女、尊敬につき	12
少女、信頼につき	17

第一部　く少女、仕事につきく 少女、事件につき

○月○日

今日から本丸につくので、日記を付けようと思う。いつか読み返してこんな事もあつたなど笑つてみたい。

鍛刀を資材が余つたのでやってみた。小狐丸が出た。．．．なんとなく私に似ているので近侍にした。髪でモフモフしてたら

怒られてしまったので、「あまりに心地良かったのでつい．．．。」と本音を言つたところ言つてからモフモフしてほしい、

と言われた。小狐丸はとても寛容だ、私も見習いたい。耳みたいところは撫でると嬉しいらしい、完全に猫だ。

しかも人懐っこい。短刀達のいいお兄さんになってくれている。微笑ましいものだ。

○月○日

今日も本丸は平和だ庭では短刀達が楽しく遊んでいる。石切丸は心配しているが彼

らもケガには気を付けているだろうから、

気にやむことはないだろう。皆が本丸の就任一周年と祝ってくれた。なんと、小狐丸が企画してくれたらしい。

飛びついたら、危ないと怒られてしまったが嬉しかった。このまま皆で平和に暮らしていきたい。

×月●日

不穏な知らせが耳に入った。最近刀剣が拐かされる事件が多発しているらしい。ウチの小狐丸は心配いらなと言っていたが・・・

不安だ。遠征の人選も考える必要があるかもしれない。

×月○日

ああ!!なんということだ!彼がまさか犯人だったなんて!!彼によって僕の相棒である小狐丸は奪われてしまった。

今すぐ助けてあげなくては、彼によって奴隷のように扱われてしまうだろう。

でも、他の刀剣達を送ってもきつと小狐丸のように捕まってしまいうだろう。ならば、私が行くしかあるまい。

刀劍達よ・・・私が帰らなかつたその時は、いや、絶対に小狐丸を連れて帰ってみせる。

私はもうじき死んでしまう。

どうかどうか裁きを彼に与えてくれ彼の名は――

「・・・日記はここで途切れてますね。敵に始末されたのか、そのまま死んでしまったのかは分かりませんが。

手掛かりにはなりませんね、犯人は知り合いだったのでしょうか・・・というかこの日記はフラグたてすぎ。

なんと言うか改善の余地はなかつたんですかねえ・・・あつ、通達だ・・・

・・・仕事しますかね。」

彼女は一つため息をついて、日記帳をかばんにしまった。

やがて群衆の一人と化した。

少女の名は「黒百合 彼岸（くろゆり ひがん）」

彼女は己が師のために今日も進む。

少女、異端児につき

少女は群衆の一人となった……はずだった。だが、少女の周りの人は彼女を避けて通った。

なぜなら、その少女の小柄な体格とは真逆の大きな日本刀を背中に背負っていたからである。

「(人混みに飲まれないのは良いことです……。さっさと本部に報告せねば……。)」
という少女に対し、人々は……。

『(なんだ、あの少女は)』『(刀持ってる、怖っ!!)』『(てか、刀デケえ。)]
と色々な感情を持っていた。

「(今日の夕飯はなんでしょうか……。しばらく仕事なので弓良のご飯が食べられないのは残念です。)]」

と彼女が考えていた所であった。瞬間、少女がグイッと後ろに引つ張られた。

同時に首にヒヤリと冷たい鉄の感触を感じた、ナイフだ。

男『おらあ!金を寄越せ!!でなけりや、この娘の首を切る!!』

警官1『くっ……。人質を取るとは卑怯な!!』警官2『その娘は関係ないだろう!』

男『うるせえ!! さつさと金だけおいて、どこかへ行きやがれ!!』

「(うわ、人質にされた・・・面倒くさい・・・) きゃあー、怖い、助けてー(棒)」

男『安心しろよ、後で闇市場の前にも行って売ってやるから。』

「(それ、安心出来る訳ないだろ馬鹿か。) : そんなー、警官のお兄さん助けてー(棒)」

警官1『クソツ!! 手出し出来ない!』 警官2『こんな時、無人部の連中さえいれば：

「それは、

無人部への依頼?」・・・は?』

「依頼なのかって聞いているの。二度も言わせないで下さいよ、面倒くさい・・・。」

警官2『この場にいるのなら依頼したいさ!! 警官1『おい、』うるさい! 「君を助けて、

その男を捕まえてほしい」さ!!』

男『無人部の連中がこんな所にいるわけねえだろ! 馬鹿かお前?』

さつさと金をおい「依頼、受理致します。・・・は?』

その言葉がまるで、さつきまでの少女とは思えない存在にした。

瞬間、少女は男の腕から小柄な体を生かして抜け出した。

「第一の依頼、私の救出は完了しました。これを預かっていて下さい、第二の依頼に移ります。」

彼女は警官に背中の中の日本刀を手渡し、男と向き合った。

男『なっ……!?! なんの手品を使ったか知らねえが、ガキの真似事なんざ怖かねえぞ
「黙って寝てて下さいませんかね。」ガッ……!!』

男がナイフを降り下ろそうとしたその時、少女は素早く男の前に潜り込み腹に拳を入れた。

男はそのまま前のめりに倒れ、少女は、「重い嫌いだから」とつぶやいて男の巨体を受け流した。

そして、男を放置し、警官に向かって「相棒、返して下さい。」と言って刀を指差した。依頼をした、刀を持っていた警官は慌てて彼女に刀を返した。

もう一人は、男の身柄を拘束しに駆け寄った。

警官2『あ、あの「報酬の方は、後日改めて無人部のものがお伺いしますので。急ぎの用があるので失礼します。」……あ、ありがとうございます!!』

少女は警官二人と男を残し、その場を去った。再び背中に刀を背負って。

依頼をした警官は、彼女が見えなくなるまで頭を下げていた。

「(あっ……遅刻してしまう。……寄り道はするもんじやないな。)」

少女は小走りで仕事場に向かった。場所の名は無人部。少女の勤め先である。

少女、帰宅につき

依頼を終えて一時間後

ガチャ

「ただいま戻りました?」「遅い。」・・・遅れたくて遅れた訳ないじゃないですか。」

?「うるせえ。さっさと手がかりになる日記帳寄せ。」

「・・・そんな短気だから彼女が出来ないんですよ日暮さん」

《ヒグレ コガラシ》

無人部所属 日暮 凧 (28. 男)

日「余計なお世話だよ・・・まったく、相変わらず可愛げのないガキが。」

「年齢はこの職場あんま関係ないじゃないですか・・・。大体私はガキじゃn「彼岸ちゃー

ん!!」・・・はあ」

?「彼岸ちゃん!どこ行ってたの!?!心配したよ!?!」

「知りませんよ・・・現場に行ってきただけです、白峰さん」

《シラミネ ミレイ》

同じく、白峰 美麗 (27. 女)

白「んもう!! 同じ部署なんだから美麗さんって呼んでって言うてるじゃんか!」

「白峰さん、年上に対しては名字呼びが当たり前でしょう?」

白「そーゆー意味じゃないの!! むー……。」

「お菓子買って来たんですけどいりますか? 金平」 白「ちようだい!!」……どうぞ。」

白「わーい!!」

白峰は金平糖を手に入れた!! ▼

部屋のソファで食べ始めた! ▼

満腹度が1上がった! ▼

「日暮さん……蒼姫、私が現場行ってくることを伝えました?」

日「いや、あいつからは聞いてないな。俺は部長から聞いた。」

「……蒼姫、だからあれほと言ったのに。」

ガチャ

?「おつまたせー! 蒼姫ちゃんが帰宅しと」蒼姫……?」……オ、オジャマシマシター。

じよ、冗談だつて!! 彼岸ちゃん! だからそのチョップの構えを解いと……ギャアアア

アア!!」

《リュウグウ ソウキ》

無人部情報担当 竜宮 蒼姫 (21. 女)

竜「うー……ひどいよ彼岸ちゃん……。お嫁に行けなくなっちゃう……。」

「安心しろ、お前は顔だけだから。」竜「なにそれひどくない!?」

竜「二人は違うと思うでしょ?……ちよ、目そらさないでよ悲しくなっちゃう!!」

日「大丈夫だ、きつとお嫁にもらつてくれる人もいるって(棒)」

白「ぶつちやけ、彼岸ちゃんの方が可愛い。(真顔)」

竜「もうやめて!!蒼姫ちゃんのHPは0よ!!」

「そのネタはやめなさい。日記帳は日暮サン(笑)に渡したから。」

日「おい、今明らかに悪意があつただろ!具体的に言うと言つて日暮さんの後ろに(笑)がつく感じだったろ!」

白「日暮く、イライラしてるの?糖分足りてる?」

日「うるせえよ!!……はあ……。こんな時、宮がいたら……。」

「宮さん今、任務中ですもんね。」

白「この、ブラコンめ!」↑

竜「リア充は末長く爆発するべきだと思ふんだ。」↑

日「彼岸以外、後で表に出ろ。(ω・#)」

?「皆さーん、お昼ご飯出来ましたよー。」

「いつもありがとね、お菊さん」

台所の守護靈こと、無人部 家事担当兼、事務 宮 菊（20. 女）

菊「いえ、こちらこそいつも楽しく料理させてもらってます。」

日「今日の献立は？」

菊「近所の農家さんにもらったきゅうりを浅漬けにしたものと、

朝市に出てた鮭を焼いて定食にしました。お味噌汁は、日暮さんの好きな、なすの味噌汁です。」

日「ありがとう。」

「「「いただきます」」」

菊「お味はいかがでしょうか・・・？」

竜「美味しい！美味しいよ菊さん！」

白「お魚もいい感じの塩加減ですね。」

日「うちの部は女性陣ほぼ料理出来んからな・・・。」

「菊さんが来る前は本当にひどかった・・・。」

竜↓魚料理作ってたはずが肉料理になっていた

白↓黒い物体が生産される

彼岸↓包丁使えないから、刀で食材を切ろうとする。

菊 「皆さんが喜んでいただけただけなによりです。」
こうして、無人部の昼は過ぎていった・・・。

少女、尊敬につき

お昼ご飯を食べた後、何人かは仕事に取りかかっていた。

「ふあく……日暮さん、持ち主の「周辺人物」洗い出せましたか？」

日「洗い出したから、楓に詳しい情報のリスト作ってもらってるとこだ……っと噂をすれば来たか。」

？「す、すみません!!遅れちゃいました!!」

「大丈夫だよ、楓さん。むしろこっちは助かるから。」

《ヒグレ カエデ》

無人部情報管理担当 日暮 楓（28・男）

楓「今回は関連性のある人物だけじゃなくて、

過去に似た事件に出た人物をリストに出しておきました!」

「……うん、そっちの方が楽だからね……。ありがとう。」

楓「い、いえ!!お役に立てて光栄です!!」

「……何で楓さんって日暮さんと双子なのにこんなに似てないんですかね?」

日「あ?知らねえよ。兄貴と俺は二卵性だからじゃね?」

楓「母さんは、育てる甲斐があるって言うてましたね。」

「・・・まあ、お二人がいいのならそれでいいのですが。（全然似てないよなあ・・・）」

竜「彼岸ちゃん！依頼きてたの!?!さっき何で言わなかったのさ!」

日「・・・遅れた理由はそれだったのか。」

「あー・・・うん。忘れてた。」

白「彼岸ちゃん、また困った人助けたのー?」

「いや・・・なんか、男に捕まって人質にされたついでに、警官の依頼を受けて解決して来ました。」

竜「びつくりしたよ！警察署の方からメール来てたから何かと思ったら

「無人部の方に連続強盗犯を捕まえていただきありがとうございます!」

だよ!?!新手的ドツキリかと思っただよ私!!」

「なんかゴメン・・・。」

楓「人質にされたって、ケガしませんでしたか?」

「いえ、むしろ犯人を気絶させました。」

全員（まあ・・・いつもの事か・・・。）

?「おー、楽しそうな話してるな！俺も混ぜろよ!!」

「・・・背後に音もなく立つのやめてもらえますか？三神さん。」

《ミカミ カゲロウ》

無人部部长 三神 陽炎（29・男）

三「悪い悪い、つい任務の時の癖がな。」

日「お疲れ様です。」

白「どうだったんですか〜？」

竜「聞きたい聞きたい!!」

三「いいか！よく聞け、お前ら！あれはな．．．」

<一時間後．．．>

三「．．．というわけだ!!」

竜・白「スゲー！／すごい！」

日「一年ぶりの任務とは思えないくらいの成果ですね．．．。」

「．．．相変わらず仕事は完璧ですね．．．三神さん。」

三「まあ俺部長だし？もつと褒めてもいいんだぜ？」

全員「二二お断りします。二二」

三「なんで!?頑張ってきた俺を褒めてよ!!」

「はいはい．．．さっすが部長、そこにしびれる憧れるー。(棒)」

三「彼岸!?心こもってないよ!?泣いちゃうぞ!!」

「もうすぐ30の男の泣き顔は見たくないです。」

三「ええー……。(。・ω・。)」

「三神さんはおいといて、仕事しますか!」

三「夙々……彼岸が反抗期だよう……。 (。 ; ㄥ ;)」

日「俺に言わないで下さい。報告書、忘れずに提出して下さいね?」

三「はい……。ん?彼岸、そのファイルの人は……」

「ん?……この男がどうかしましたか?」

三「この間見たブラック本丸のリストにのつてたんだよ、それだけ。」

「……。いい手がかりをありがとうございます」

三「え、ちよつ、彼岸!……。俺なんかしたか、楓?」

楓「いいヒントになったんじゃないですか?」

三神が頭に疑問符を浮かべているその時、楓は彼岸の出でいったドアを笑顔で見つめた。

楓「彼女なら大丈夫ですよ、きつと。なんせ……。うちの最年少にしてしつかり者ですから。」

彼の眩きは三神と蒼姫の大声にかき消された。

「無意識に手がかり出すとか……。本当にスゴいなあの人。」

無人部最年少幹部 黒百合 彼岸（16. 女）
少女は新たな手がかりを求め今日も行く

少女、信頼につき

「ふーん．．．コイツが怪しいな．．．他は多分ダミーとかフェイクだろうけど。」

ファイルの中から一人の女性の写真を見る。名前は 桜音 葵《サクラネ アオイ》
令嬢のようで本丸も金、財力で手に入れたようだ。

「にしてもこれはないわあ．．．」

そのブラック本丸リストによると、刀剣男士への過剰な命令。休息を与えないだけでなく、

怪我の治療もしない。この前本丸に搜索が入ったらしいが成果は出なかったようだ。

「そんな知能犯に真つ正面から向かっても意味ないでしょうに．．．」

ため息について資料を元に戻し少女は資料室から退出した。

「また潜入捜査になるかな．．．太郎太刀、留守番お願いしていいか？」

彼女は背中の大太刀を正面に持ち話しかける。

「．．．って聞かなくても大丈夫だったね。」

少女は薄く笑みを浮かべて鞆を撫でた。

「さて．．．また手続きしなくちゃダメですね．．．面倒ですけど。」

いつもと変わらない、その事実には少女の表情は皮肉じみた笑みへと変わり、再び歩き出した。

「作戦とかはあつちで考えるかな・・・」

その足並みは軽く、儚く、どこか消えてしまいそうなほど不安定だった。

~~~~~

新月の夜、一人の女は問う

「私の事、愛してる?」

男は答える

「無論、大嫌いだ」

女は愉快そうに口角をあげて、その幼い顔に似合わないほどの邪悪な笑みを浮かべた。

そして、手に持っていたその包丁で男の体に傷をつけた。

男「ッ!?!」

男はその痛みに耐え、気丈にもその女を睨んだ。

女「・・・その反抗的な態度は嫌い。こんなに愛してるのに、どうして答えてくれないの?」

冷たいその目が、光のない目が男を捕らえる。

まるで、自分こそが正しいとでも言うように。

男「何でだろうな？・・・ただ一つ言えるのは、」

俺は、お前のような女が嫌いだ。

女「へえ・・・後悔しても知らないわよ？私、執念深いだよ。」

男「分からないのに反抗などしないだろう・・・何より、俺がお前に屈する事などない。」

女「見た目が美しいだけじゃなくて、心も強いのね・・・でも、それが折れる瞬間が楽しみだわ。」

女はクスクスと笑い、追い討ちをかけるかのように言葉を紡ぐ。

女「今度、見習いの女がこの本丸に来るのよ」

男「ッ!？」

女「安心して頂戴、前と同じようにたつぷり私が遊んで」

壊してあげる。

女はケタケタと笑う。男は悲しそうに、悔しそうに顔をふせた。

小さな箱庭の王女は夢をみる自分が美しき三日月の王子に愛される夢を。

一人、暗きその部屋の中でまるで人形のように。